

2021年9月5日～9月11日 各家庭でのディポーション用テキスト

■疑いについての訓練 (2/3)

みことばによる啓示と御霊による啓示が、これ以上に現実的で確実なことがありますか。このあかしを見たヨハネは、イエスこそキリストであり、世の罪を取り除く神の小羊であることを、疑う余地のないまでに知った。それなのになおヨハネは「疑惑城」の土牢に落ち込んでしまったのである。私たちもまた、みことばにより御霊による、同様に確実な次のあかしを持っている。すなわち「聖書はすべて、神の靈感によるもの」であること（Ⅱテモテ 3：16）、「すべての人は、罪を犯した」けれども、私たちは「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められる」こと（ローマ 3：23、24）、「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」こと（ヨハネ 1：12）、「神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知る」こと（Ⅰヨハネ 3：24）である。しかし、それでもなお私たちは、バプテスマのヨハネのように、疑いの激しい試練にあう。

霊を覆うこの影、たましいを深く探る試練、性格をよくするための懲らしめ、心の束縛、絶望—これらはどこから来るのだろうか。先駆者ヨハネの体験は、この問いに対する答えを得るのに情報を提供し、光を与えてくれる。私たちもヨハネのように、肉体的に、あるいは霊的に、執念深いヘロデの足の下に踏みにじられ、ついには「おいでになるはずの方は、あなたですか」と不審に思うようになることがある。健康の喪失はたましいのいかめしい残忍な獄吏である。耐えがたい苦痛、いつまでも回復しない虚弱は、きのうの喜びを薄れさせ、私たちはダビデのように不平を言う。「苦難の日に、私は主を尋ね求め、夜には、たゆむことなく手を差し伸ばしたが、私のたましいは慰めを拒んだ。……あなたは、私のまぶたを閉じさせない。私の心は乱れて、もの言うこともできない。……主は、いつまでも拒まれるのだろうか。……主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。……神は、いつくしみを

忘れたのだろうか」(詩篇 77:2-9)。

次に、幸福の喪失も人の心に深い影響を与えることがある。私たちはヨハネのように、人間的な交わりの美しさ、人間愛の力強さ、救い主と隣人に対する奉仕の満足感、などを味わってきた。ところが、あふれるばかりの祝福の美しさの代わりに苦悩と放心の灰をなめ、また救い主の喜びの油で力を与えられる代わりにたび重なる悲しみのために心弱まり、ご摂理と御守りのゆえに救い主をたたえようとしたのに心が重くなり、望みを失い、無力になってしまった。私たちのたましいは冷酷な試練の中にあり、恋人や友人は遠ざかり、私たちは「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」と叫んで、恐ろしい暗影を推し測ろうとする。

希望の喪失も、人を「巨人絶望氏」の振りかざす野生りんごの木のこん棒の下に置く。そこで打たれ続けて肉は裂け、血がほとぼしる。私たちはどうにかして立ち上がり、疑いや恐怖をふり落とそうとしてよろめくが、それは何のために、またどのような手段によってするのか。私たちは、もはや望みはないと自分に言い聞かせ、次のような詩人のことばに同意する。

真理はとこしえに絞首台の露と消え

悪はとこしえに王座にすわる

私たちは自分自身を弁護することができないし、また他の人々に助けをもらうこともできない。この環境が好転するようなことは全くないし、まして正義が行なわれるなどということは思いもよらない。自分を取り押さえているのがあの「ヘロデ」でなかったなら、と願うのだが、「ヘロデ」はどっしりとそこに腰を据え、力を誇り、容赦なくののしりを浴びせかける。私たちは網にかかってしまう。人々は私たちの頭の上に乗る。私たちは火の中、水の中を通り、「主よ、その方はあなたなのですか。顧みてくださるのですか」といぶかるのである。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十九章「疑いについての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。